

太 棹

第百四十八號



昭和十八年九月廿三日
印刷
昭和十八年九月廿五日
發行

（每月一回）
廿五日發行

太棹
（第百四十八號）

風流・金ぶら・茶漬

(美地句)

去月屋

新橋二ノ八
電銀二〇八

席 貸

並木俱樂部

浅草・雷門

電話浅草二二三五番

御 禮

東京臨時第一陸軍病院

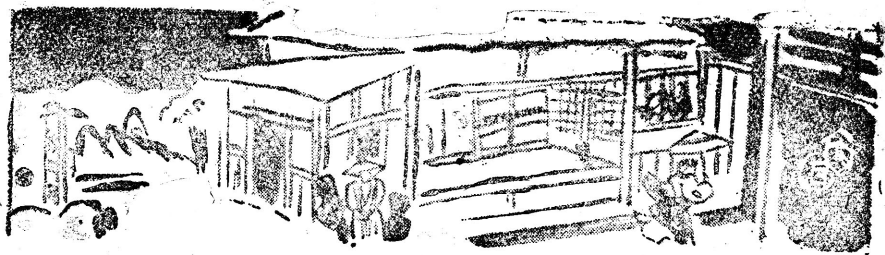
大棹百四八號
五十冊

東京臨時第三陸軍病院同三十冊

寄贈者 齋藤金太郎氏

右弊社の趣旨に賛同せられ傷痍將士慰安として御寄贈を賜り候段難有奉深謝候

太 棹 社



太 棹 第四百四十八號 目次

表紙・カツト……………齋藤清二郎

東上の文樂座(二)……………齋藤拳三(二)

端場の研究(二)……………川口子太郎(九)

文相官邸に無用の「内幕話」……………中山泰昌(三)

文樂に關する青々の俳句……………安原仙三(二六)

秋津洲の發音……………岡田蝶花形(七)

忠臣藏スバイ合戦(二)……………伊藤紅二(八)

人形に従いて語つた組太夫……………吉田文五郎(三〇)

素女の『合邦』……………内田三千三(三一)

消 息・會 報……………(三一)

あれからの私(波多野三樂) 草津より(鈴木美松)
大垣より(吉田美地句) 富山より(和田春和) 綾秀

會より(傍島出雲) 城崎より(濃沼馨) 別府より(足

達延壽) 秋田より(鈴木美松) 高知より(魁家廣丸)

太 棹 社 彙 報……………(二六)

東上の文樂 [二]

齋藤拳 三

第五回

文樂出開帳の序幕は何時でも掛合で、此度も十種香を織太夫の八重垣煙で以下若手の掛合である。前日まで織太夫は聲を痛めてゐて伊達太夫の代役だった由、だがまだ此の日も全快しては居なかつたが、流石に他の人よりは群を抜いてゐた。觀西翁の絃は前後七回の内これが最上で、八十歳の高齢で艶も有り、音も大きく美しく、四段目らしい藝格も歴然と聴けて苦手の奥庭がないだけに尙結構だった。一體義太夫の三絃は五七年も太夫を弾かずに、素人の稽古ばかりして居れば大抵ぼれてしまふのに、道八と觀西翁は全く異例なのは兩人とも素質の善い事も勿論だが、一つには珍らしい健康の保

持者だからであらう。義太夫節の太夫は勿論、其の三絃にしても一つに健康に正比例するもので、名人鶴澤勝鳳の如きも觀西翁の歳にはもうこれ程には弾けなかつたのは一つに肉體的な條件が許さなかつたのである。これを殿母太夫の様な無批判な藝人が昔同様に有難がつて居たのは玄人の陥り安い一種の迷信なのである。

十種香の人形は少しも面白味が無い、特に此度の龜松に限つた事ではないが、勝頼が上手、下手の部屋をいち／＼寫實的に覗き廻るのは故雁次郎同様の惡寫實で、大阪歌舞伎と共通な病弊である。

奥庭の狐火は太夫も三絃も人形も、もつと一念岩をも貫く懸命さと凄味に焦點を置くべきだと思ふ。

こゝを攝津大掾に稽古してもらつた某三味線彈の實話に寄れば、「忽姿狐火」の件の如きは大掾の音使ひが餘りにも巧妙で、フウと狐火が尾を弾いた様でどこから撥を下してよいか見當が附かなかつたさうである。其處まで行かなくとも玄人はすべからず藝の標準をぐつと高所に置いて、それを目標に死物狂ひの勉強を續くべきであらう。

第二の西亭作並に作曲の「偲ぶ錦」は呂太夫が主演する爲に相三味線の老巧仙糸がこの場の三絃を勤め、亦榮三が母キミ刀白を遣ふので、兎も角も幕切れまで辛抱出来るのは二人とも偉大な魅力の所持者である。そして風説によれば、松之輔の作曲と云はれる餘り上出来でもない此の作曲を、仙糸が彈いてるのは潔癖な仙糸として大勉強である。

然し文樂も、空の軍神あたりの新作を上演する場合は、西亭などと匿名など用ひぬ堂々たる一流の作家に屬托して、作曲者も亦心血を注いで作曲すべきであらう。眞に空の軍神に感激して止むに止まれぬ新作上演の情熱の見られないキツ物的な作品ならば、全く勞して功少き努力と云はねばなるまい。

大隅太夫の辨慶上使は、大まかで豪快奇抜な作意が大隅の藝風と一脈相通じる所が有り、調子こそ昔より下つて少々迫力を缺くが相當に面白かつた。「此の間に一寸母さん」も巧い言葉だった。「おう其片袖は」の辨慶の言葉もあの場合の

辨慶らしかつた。「花の井こちへ」もおどかしでなく結構だった。「仔汁の様子聞く信夫」の邊りは清二郎の絃にも一寸破綻があつたが、大隅の方も「相生の一の合の手の間に湯を呑むなどの不行儀が有るので、これでは清二郎の爲にもなるまいと思ふ。

一段中一番結構なのは「お主の身變りだ」を小音に云ふが奥へ氣を兼ねる氣分も十分うかがはれ亦情味も溢れて居た。

文句の方では「作り花」を「身變り」と云ふのも悪いし、「一の谷へも押寄せ」も誤りである。「押立て」でなくてはならぬ。人形は甚だ平凡で、故雀右衛門のおわさなど衛立てで信夫を下手へ押しやり、吾が子に見へぬ様にして「娘が聞く前恥かしい昔語り」になる面白い獨特の演出法など、大抵其の根元は人形らしく思はれたに、誰の人形を見てもおわさは甚だ平凡で、光造のおわさなど唯舞臺一パイに動き廻るだけで甚だ不感服である。辨慶も「三十餘年の溜泪」で合引からころげ落ちて片袖を頭へスツボリかぶる奇抜な歌舞伎の技巧に比すれば、玉助のは後向きに腰を落して泣くだけで甚だ平俗である。然し玉助の辨慶は榮三には無論及ばないが玉造よりは結構で、「生死の境」の動き「呆れ果たる」の刀を下りに下げた形、(歌舞伎は此の件で刃を懷紙でふき上げる良き見得がある)「鬼若丸だ」で右手を頬にあてる件「早玉の緒も」で合掌する件「門前に控えし」で「人の首を兩手に持つ

形等、(此處も歌舞伎は結構で、信夫の首を赤い布、侍従太郎の首を白い布につくむ)相當に見られる。

双蝶々曲輪日記、引窓はあの幕開きのよき端場で、七五三太夫を弾く老巧綱造が若々しい強腕を發揮してゐた。

奥は良辨杉と共に古靱太夫得意の語り物である。此度は話の様に云ふ言葉に研究と苦心のあるのが解る。「八幡の町人」や「勝手にしをれ」など其の一例である。「河内へ越へる」や「よもや其れへは行くまい」も前年のより世話味が多くなつた。「罰當りめ」のくやし泣きも「無念な」を吹く様な云ひ方も結構だ。節の方では「忝じけなや」から「袖は乾かぬ」のあたりが面白い。

清六の絃も益々結構である、初めて古靱太夫を弾く様になつた時代を考へると此の人の三味線も古靱太夫と同様の大きな變化が見出される。此度など「幸有りをう窓の繩」あたりを憂いに弾くなどの變化の一例である。然し古靱太夫の淨瑠璃が益々地味になつてくる以上、此んな段切れに近い箇所は理論を抜きに派手に弾いてもらひたく思ふのは筆者の一人よがりな自慰であらうか。研究家諸賢の教を待つ、よき研究課題である。

人形は文五郎のお早が佳作で、女郎上りの世話女房と云ふ此の役は色氣を遣ふ事の得意な此の人には全く打つて附けて「猶も様子を」の引込み、「おるも」の邊の持味「仲に立つ寂しくさせる事おびたらしい。

此度の人形陣は小兵吉、政龜の押込め隠居から龜松、光造、榮三郎と云ふ未熟な人形使ひに大役が配給された結果は紋十郎を一層光らせる結果となり、吾々の觀賞眼もスッ入りとなつて此人の板額なども、矢を取つて入る件など相當に見られた。然し玉徳の與市は玉助急病の代役としてもお粗末なものだつた。

次が上京する度に語らせられる古靱太夫の堀川で、番組が發表されると食べない先からゲーと來るが、津太夫の沼津とは違つて來る度に少々づつ新工夫のある人として聴けば相當面白い。「それにまだ」を三度目から思ひ附いた様に語る點、「天命逃れず」のアカリを際立たせず演る事、書置の件と妻のクドキが「節に言葉有り」、「言葉に節有り」の本領を發揮して居る事等。言葉の方で「ノキマス」や「お俊ぢやないか」が日常茶飯事の會話になつて居る事、「振ふ事はない」の寫實味などが今度の進歩やら改良やらである。この堀川は古靱太夫の語り物中、最も青年時代と變化の多い語り物でもあり、亦巧く考へた演出である。清六の絃も益々よく、お俊のクドキにも少し女郎らしい「間」が聴ければ完成品であらう。

人形は榮三の與次郎がこれも益々洗練、老成した出來で、猿廻しになつてからは特に巧妙である。「よい女房」で一寸泣く件など實にすばらしい持味である。特に火鉢をあはく件

身のせつなさ」をじつと持つてる腕「剃刀を當て事は」の泣く件等、堀川のお俊、日吉丸のお政等と共に此の老大家の代表作と云へると思ふ。榮三の十次兵衛を見ると此の役は非常に横向きに極る形の多い役で、此の一段が嘆きの間を三味線が泣かぬ特異の節つけと共に引窓の「風」とでも云ふのであらうか。

次の壺坂を相生、南部のカケ合にするのはまだしも、三味線まで吉五郎と重造のカケ合にするのは悪弊である。役が振り切れぬのならばまだしも、前半、後半に分けた方が善い、カケ合で太夫が語る箇所を、いち／＼合三味線が弾くとしたら忠臣蔵の七段目などは九人で弾かなければならぬ勘定である。

第六回

久々に和田合戦女舞鶴の市若初陣が出たが、前半の伊達太夫はあの美事な聲の持主の將來の大成を樂しむだけのもの、喜左衛門の三絃もよく弾ける人が此の程度に内輪に弾いたらなあ？の感が深い。後半の織太夫は河連館や此の一段の如きを聴くとまだ上位のシツカリした三味線を付けて置きたい感じが深い。

市若初陣は東京では二代三代の越路が語つて居ないだけ土佐太夫、吉兵衛を懐しく回想させるのは義太夫節の前途にしても飯を食ふ仕事にしても少しも當て氣が無いので、決してあの場合の情景をこはさないのは若い人形遣ひの参考とすべき箇所である。「呼吸せき門口から」で首を左右に振る動きも、此人なればこそ出来る型で、未熟の若手がやつたら大變である。一己れはあの時左を遣つて居たから出来る」などと思つたら大間違ひである。

文五郎のお俊も佳作で、暖簾口から出た件の如何にも思ひに沈んでる姿「人の落目」のキセルを使ふ件、「世話しられても恩に著ぬ」の懐紙を使ふ件等、後進者は技巧より其の根本精神を學んで望しいと思ふ。小兵吉の婆も「鬼は迷度」の嘆きなどよい。紋司のお鶴は相變らず稽古に來た小娘でなく老婆に地唄を教へに來た様な遣ひ方で「縁なき衆生は度し難し」である。

本藏下屋敷はどうにも辯護のしようの無い悪作で、特に若狹之助の「余を恨むであらうな」など、どう語つてよいか見當さへつかない悪作である。釜のにお湯をかければ毒が入つてゐなくても竹蘭が枯れるのは當り前である。結局、故大隅、團平あたりの良き技巧を味ふ以外に、存在價値のない作である。こんな悪作こそ、故人の残したよき演出法だけを他の名作に應用して、此の曲は廢曲とすべきであらう。

然し前半の呂太夫を弾く仙糸の三味線は全く此の人の良き間の味へる佳作である。其の弾く手も團平改作の寡聞の吾々

が聴きなれぬ箇所があり、故春子太夫の相三味線時代に二人で故人大隅あたりから習つたものであらう。なれなど義太夫節が家元のなき爲「風」と稱して、其れ自體が各一曲、一段の家元を爲して以上、義太夫節の善悪は一つにネタ即ち習つた系統の善悪にかゝつてゐる一つの良き實例でもあるのである。

人形も作の出多羅目に劣らぬ悪演出で、榮三郎の三千歳姫は「殿の御上意」と床が語つても逃げずに平氣で伴左衛門のそばに居るので、次の「お逃げなされるな」が全く意味をなさない。門造の本藏も「罨目をスツバと切り拂ひ」ですぐ土タンから出てしまふのは滑稽だ、これは若狭之助の「近う參れ」まで其の場に座つて居るべきである。一體柴小舟の歌は若狭之助、本藏主従が別れを惜む件に、どこからとも無く聞へて来てこそ「思ひもよらぬあの歌は」と云ふ言葉が始めて若狭之助の口から出るので、すぐ側で三千歳姫にコロリンシャンとやられては全く大死である。

追出しの關取千兩職は意外に一歳の割に一觀西翁の絃がよく、玉助役の紋太郎の鐵嶽に比して政龜の稻川が衰へても段違ひにしつかりしてゐるのが、此れも意外と云へば意外である。吾國傳統の古典藝術が如何に完成までに多年の年月を要するか、亦如何なる天才と雖も少數の年月では決して奥義に到達出来ない事を雄辯に物語つて居る實證である。

凡である。この場では人形の門造の師直が面白かつた、「務むる所はきつと務むる」で両手を上げる傲慢な形も愉快だし「出方題」で扇を開いて両手を上げる極りも立派であつた。

裏門のカケ合でも太夫、三味線より、文五郎のお軽が相變らず見ものである。お軽が勘平の刀で伴内の足を拂ふ仕草や光造の伴内が、頭があるかと自分で試して見る仕草も無邪氣で、如何にも愉快な人形芝居らしい。四段目になつて相生太夫の花献上は甚だ平凡だつた。斯道で非常に口傳の多い郷右衛門の世話と時代の入りまじつた言葉などまさか知らぬ筈はあるまいと思ふ。練習の不足か勉強の足りない爲か、甚だ受取れなかつた。然し三味線の吉五郎の方は至難な花籠の場を苦勞して弾いてるのが、はつきり聽かれた。此れに比すれば後半の大隅太夫は結構で「申附くるもの也」などなか／＼巧い、「無念の涙ハラハラ」の寫實的な云ひ方なども上々である。清二郎の絃はまだこんな貫目を必要とする役場だと若さが耳だつのは仕方のないものだ。若手の逸足、清二郎にして此の感のあるなど、つく／＼吾が古典藝術が年數を要する以外、どうにもする事の出来ないの如實に教へられるものである。

人形は榮三の由良之助がやはり良く「委細」を耳に口を寄せて云ひ、「承知仕る」で足拍子を踏んで下る件や、「打守り／＼」で同じく足拍子を入れる動きなど人形劇特有の面白さ

第七回 忠臣藏大序より七段目まで

忠臣藏の夫序を見て感じる事は人形芝居が歌舞伎より段違ひにつまらない事である。あの歌舞伎の口上、人形の役人換名の読み上げがあつて、斯道でやかましい七五三の東西東西のカケ聲から直義以下首をうなだれて居る人形身の形が一人一人チヨボに呼び起されて首を上げて極る面白さは、とても人形劇の遠く及ぶ所でない。其の昔彦六座で忠臣藏の大序に團平、彌太夫以下の大幹部が出揃つた壯觀を忍ぶのが出来なない相談であるとしても、せめて萬年青年の強腕、鶴澤綱造にでも弾かせて見る案は如何なものであらう。御當人はさぞ迷惑な事ではあらうが。

つばめ太夫の直義が如月下旬でなく、院本通り二月下旬と語つたのが耳についた。

次の大手、進物場で千駒太夫の伴内が歌舞伎同様、「番頭中」と云ふ進物の目録を読み上げて、自分の名前と思ひ違ひるクスグリは可笑しいと思ふ。他人が讀むのを伴内が聽いて思ひ違へるならば格別、當人が讀んでゐるのである。番頭の「番」と伴内の「伴」とでは丸で字が違つてゐるはずである。昔の宛字の多かつた時代の誤謬を御丁寧に到襲する必要はない。

裏門を弾かせると獨特の持味のある仙糸も殿中では甚だ平である。「根ざしは斯くと」の腹帯を締める仕草や「知られけり」の下手向きに納まる件など良き修業が物を云つてる眞似られぬ持味である。

政龜の石堂も良く、判官の死装束を見ての軽い思入れなど丁寧である。小兵吉の郷右衛門も流石業々とした出来で「一人も叶はぬ／＼」の邊など、これも美事な持味だ。

人形芝居の五段目はもつと現作通り定九郎が「おあい」と與市兵衛の後を追つて出る方にしたい。歌舞伎では先年本郷座で、左團次と左升が院本通り復古的演出をして立派なものであつた。人形のあの奇想天外な定九郎のグロテスクな味だけで此の段を終始するのは餘りに單純過ると思ふ。

伊達太夫、喜左衛門の身賣り、此の段の「風」は、もつとしんみり語るべきものと聽いてゐる。

此の場の人形は「寸分違はぬ糸入綺」で一文字屋が中央に立つてるのが獨特である。然して文五郎のお軽、政龜のおかや、共に結構で「おぼえがある」の邊など二人とも恰も名優の捨ゼリフを聞く如き感じである。「人並な娘を持ち」のクドキで柱にもたれるお軽の動き、勘平とお軽のやり取りの間に一文字屋に話かけながら煙草盆を出す件のおかや、二人とも慈味津々たる妙技であつた。

古靱太夫の奥は此の人の堀川とは正反對に青年時代の語り方が其のまゝに現存して居る語り物の一つで、言葉には老熟した味が所々に耳に附いた。「聞へた」の婆の言葉の小聲に云ふ巧さなどが其の一例である。

政龜のおかやは奥になつても依然よく「歳よつて夜の眼も寝ず」を與市兵衛の死骸の側で演るのが此人獨特である。「生けて戻せやい」で足拍子を入れて横向きに延び上つて極る件は無器用な政龜としては美事な演技である。紋十郎の勘平は二人武士のみに紋服に着かへ、刀に顔を書して髪をなほす等、歌舞伎と大差がない演出で、小兵吉の郷右衛門の方が「うつけものめが」で勘平を打つなど人形獨特の遣ひ方である。七段目になつて一座總出のカケ合は一段丸ごかしに省略なき丁寧な演出を多とした。唯、古靱太夫の由良之助、織太夫の平右衛門では同じ人が語つてゐる様で甚だ平凡である。カケ合は全く違つた持ち味の人数が、一人の三味線で語る興味が大部分なのではあるまいか。

古靱太夫の由良之助は、此人らしい長所の出ないものである。「江戸三界」の唄など由良之助の唄より古靱太夫の唄の様に聞へて、上手過ぎて不感服である。南部太夫のお輕は言葉は巧いが節になると、唄つてしまつて、「節に言葉有り」の感が少い。

觀西翁の三味線もこんな眞目と艶を同時に必要とするもの

になると難色がある。

七段目の人形は演出法其のものが忠臣藏全段中の白眉でもあり、榮三の由良之助、文五郎のお輕、門造の九太夫、共に佳作である。榮三の由良之助は「吾等知行千五百石」で扇を開いて一寸意張つて極る件が巧い。特に「化現はして一献もろか畜生奴」の扇を顔にあて、互ひ違ひに九太夫とからんで動く件は門造の九太夫と共に立派な遣ひ方だつた。「めれになさで置くべきか」の扇で顔を隠して入る件も相當に面白い。文五郎のお輕も此の老大家の長所の良く流露する役で、最初の柱にもたれた形、延べ鏡の件「ほんかいな」の由良之助への色氣「笑うでな」の指さす極り等、こんな箇所になると全く文五郎は絶品である。「世にも因果」の唄で、由良之助は九太夫に氣を兼ねての引込み、お輕は足拍子を踏んで下手への動き、此所も七段目の人形の歌舞伎に見られぬ良き箇所と云へる。平右衛門が九太夫を高く兩手で指し上げる幕切れも同様である。

舊作 山田壽飄

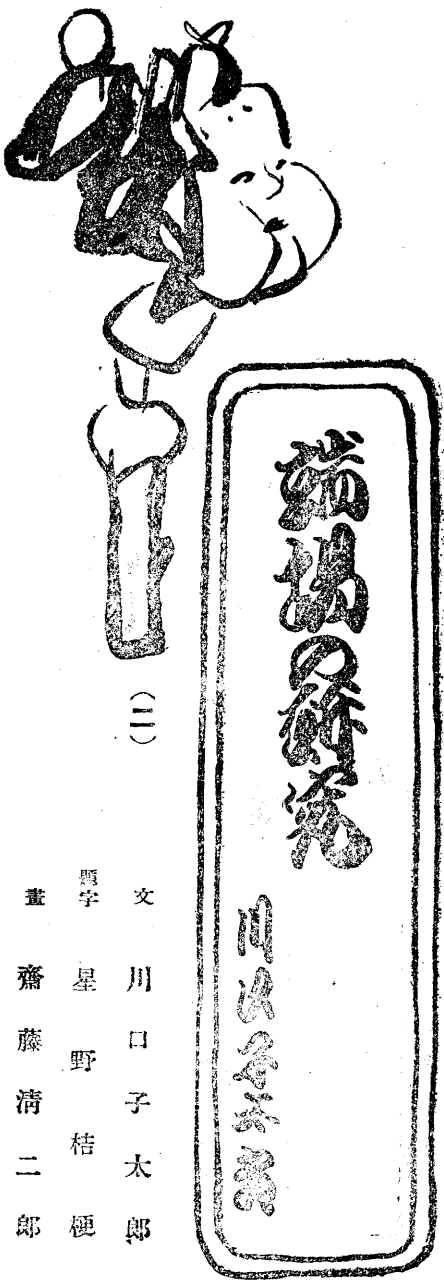
慰友人之病床代作

宿痾未治所思長

滿庭新綠罩清香

禽聲訪我吾還聽

終日無爲送夕陽



六

忠臣藏三段目の端場で最も風情ある點景は夜明け前の堀端の柳かげにボツンと燈された提灯のけだるい灯の色に浮き出でた腰元おかるの「文使ひ」の立姿であらう。彼女の役目は主人判官の奥方顔世御前から高師直へ宛てた返歌の使ひである。がそれはつけたり、彼女の心は、まゝならぬ奥つとめの身の、暗れて逢はれぬ戀人早野勘平と、此機會にはかない逢瀬を樂しみたいばかりで一杯である。門内から取次に出て來た

勘平も勿論惚れた女だから、彼等二人の若き欲望は此處に充足せられたのではあるが、其處に計らずも殿中の騒動は惹起せられ、忠臣四十七士はもとより、其親にも妻子にも、限り無き悲劇を發生せしめる「忠臣藏」事件の端緒がひらかれるのである。蓋しおかるの文使ひした短冊には顔世が師直の横戀慕をはねつけた「つまな重ねそ」の歌が書かれて居り、これを手渡された師直は戀の叶はぬ意趣晴しに判官に悪口をし、遂に判官が双場に及ぶ段取りになるからである。斯く事件の發端たる重要な意味のある端場が近頃では文樂

でも大抵カットされてゐるし、芝居でも進物からすぐに殿中になつて、文使ひは演らないのが當り前になつてゐるのは残念である。この件を演らないと、観客は、よりによつて饗應の式の當日に女房の文箱を持つて登城してくる判官といふ男の間抜けさに呆れるであらうし、更にこの日大切な役目を勤める夫の師匠養たる師直に對して、物もあらうに肘鐵砲のレターを送る顔世御前といふ女の馬鹿さ加減に至つては、あいた口がふさがらないであらう。

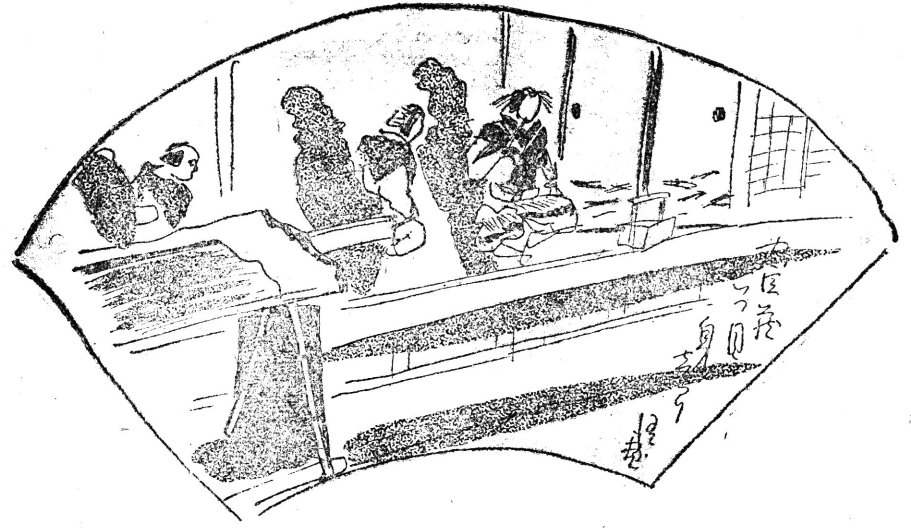
然し決して、昔の淨瑠璃作者と雖もかゝる非常識は書いては居ない。文使ひのおかるの詞に依つてわかる通り、顔世は一時は興奮して師直宛にこの歌を書いたもの、「しかしお取込みの中、間違ふまいものでもなし、まあ今宵はよしにせう」とするのを、おかるが勘平に逢ひたい望み「何のこの歌の一首や二首、お届けなさる程の間の無いことはあるまいと、つい一と走りに走つて来た」のだと、充分合理的に書き上げられてゐるのである。

これに依れば、もしもおかると勘平が人目を忍ぶ戀仲でなかつたならば朝の暗い内から彼女が一人いそいそと文使ひの役を買つて出る筈が無く、さすれば問題の文箱は式日の殿中へは遂に出現すること無く、師直はおでこを、判官は腹を、お互に切らないでも相濟んだし、四十七の忠星、夜は亂れて現はれる必要も無く、本藏に至つては誠に幸福なる一日で無事終了してしまつたに違ひないのである。

故にこの文使ひの端場を丁寧に上演すれば本篇に於けるおかる勘平の存在は更に一層重要性を増加するし、或は又、若氣の面白盛りの戀愛遊戯が如何に周囲の人々に迷惑を及ぼし、無辜の第三者に迄とんだ災難を浴せか

けるものであるかといふ實例にもなつて、世道人心に些か裨益するところあると云つても滿更嘘ではなからう。殷鑑遠からず、鎌倉における足利殿中の刃傷沙汰のために、遠く京の片ほとり山崎街道では善良なる百姓爺が殺され、平和に目なたぼつこをしてあるべき婆さんは一瞬にして夫も婿も娘も失つて、たつた一人ぼつちにされてしまつたではないか。一人の過失が飛んでもない所にまで波紋を擴げる、作者出雲千柳松洛の名トリオの構想の實に巧妙にして合理的なること、僅か十數分の短き端場文使ひの段を以てして、尙窺ふに足るのである。

讀者は私がかくも忠臣藏三段目の端場に就て述べた理由がわかつて下さつたと思ふ。同時に、文樂や歌舞伎の當事者に



は、今後可及的この端場をカットしないことを切望する。蓋し、本藏の進物とおかるの文使ひは殿中刃傷に必要不可欠の二要素であるのみならず、其一要素づゝ擔當した本藏とおかる勘平は、一方は分別ある忠義の老骨、一方はうら若き享樂最中の美男美女の對照であり、それが老人は老人なりに、若人は若人なりに、同様に過失を仕出かし、その贖罪の爲には老いも若きも我命を殺し身を捨て、解決をつけねばならぬ、人の世の掟といふやうな眞實の一端にふれるものがあるからである。

人の身の頼りなさは明日をも知れぬ、底知れぬ悪意ある運命の怪物が、つい足下に恐しい口をくわつと開いて待ち構えてゐるのを知らずに、本藏はひたすら主人の身の上を氣づかつて城内へ、戀に酔ふおかる勘平は主人の事なんか忘れて「もうやがて夜が明けるわいな」と時間の方の心配ばかり、蓬瀛の短きを啣ちつ、「手を引き合ひ、うちつれ」のオクリで城外の腰掛へと急ぐのである。如何にも此端場は作り事らしくなく、自然の経路を踏み乍ら、人々が運命の深淵に音も無く落ち込んで行く、どうにもならない人生の姿をありのままに描いてゐるではないか。



右の二つの端場から切の殿中刃傷の段になり、「上を下へと」の三重で、切の太夫がかわると、後の太夫は「立ちさわぐ」と語り出す。即、切の後にいつてゐる端場、落合と稱する「裏門の段」である。此處に至つて俄然おかる勘平の男女は蕩然たる戀の夢から覺醒させられた。今迄の楽しくも美しい時間は忽ち驚愕、失望、悔恨の時間に變つた。蓋し、彼らが戀に酔ひ痴れてゐる間に、主人判官は殿中で刃傷に及び、既に網乗物で屋形へ護送されてしまつたからだ。「早野勘平うろろ眼」と進退こゝに極まつて、申譯に切腹と取り上げる刀には腰元おかるの白い手が縋りつく。女の涙と口説は悲嘆の絶頂に於ても尙熾激的である。勘平の若い命は現世の歡樂にたつぶり未練があるし、女は墜落を嘆いてゐるし、こうなると簡單には死ぬるものではない。彼は心では濟まないと感じるから「時節を待つて御詫び」とせめてもの自己慰安をし乍ら、女の故郷へ身をかくす氣になつてしまふ。後世の色男連中の同感こゝに集まつて、扱こそ、素人芝居で三十六人の勘平が出て来る所以である。

悔恨の時間は諦めの時間に移り、やがてはボードレールの詩にあるやうに忘却の時間が来るであらう。彼等が凡てを諦らめて立去らうとする時、この凶しき夜は漸く仄白んで、横雲の棚引く東の空には、人間の社會の騒動など知らぬ顔で、群れ鳥が啼きつれて飛んで行く。明け六つの鐘がきこえ、人

の身の上は變つても、今朝は昨日の朝と少しも變らない。「塙を離れ飛ぶ鳥、かわいかわいの夫婦づれ、道は急げど後へ引く、主人の安否いかゞぞと案じ行くこそ」の段切にはなにか諦らめたやうな、悲しいやうな、そして又嬉しくもあるやうな、複雑な感傷が淡い哀愁となつて滲むでゐる。明け行く空、城の石垣と松の樹を背景に若く美しい男女の人形が一對——「夫婦ヅウレ」チリガンツン「エ、エ」チリレンツンと絃について、勘平の人形が立戻ればおかるの人形が引き止め、おかるの人形がふり返れば勘平の人形が抑へて、はては小さな首が鼻と鼻をくつきつけてうなづき合ひ、離れたり、もつれたり、足拍子をふみつき去つて行くこの端場の舞臺の情趣は「忠臣蔵」全段中でも特に印象的である。前號で私は端場の妙趣は人生の日常生活の隅々にこぼれてゐる情抒味の作爲的でない表現にあると書いた。忠臣蔵三段目の三つの端場、進物、文使ひ、裏門の段も極めて自然な、さもありさうな人間事の描寫であり、人の世に禍を降りかける魔の日の、大凶時に災された人々の嘆きの悲歌だとも云へると思ふ。

文相官邸に於ける無用の「内幕話」

中山 泰 昌

▽わが古典藝術の香りを、戦ふ文教の心にたぎこめてほしいと、日本文化中央聯盟では、二十三日午前十一時から文相官邸で、「文樂講座」を開く。受講者は岡部文相 菊池次官、阿原教化局長、小山文化施設課長及び情報局井上藝能課長等約十名。
▽：實演は人形は榮三、文五郎、紋十郎、淨瑠璃古靱太夫、大隅太夫、三味線清六、綱造の一流どころ、官邸には珍しい太棹の音を響かせつゝ、大臣以下が炎天下の「藝能練成」をうけるわけ。(七月二十三日、東朝)

この記事の載つた日の午前十一時から、文相官邸ではなごやかな「文樂座談會」。恰かも新橋演舞場に興行中の文樂は、連日の大入超満員に十日間の日延べといふ「空前の盛況」を満喫してゐる。こゝもと文樂の大當りといふところ。

この文相官邸に招かれたといふことは、何と云つても文樂一統の光榮である。されば藝の朝日文化賞に萬歳を歡

呼した若手組は、重ねての斯の光榮に隨喜の涙を流すことと思ひきや、今度は逆に不平囂々「こんな馬鹿なことあらへん」と怒りきつてゐる。これは又どうした事かと探つて見ると、其の曰くは斯うである——

「まるでナツてやしまへんぜ。先方さんは我々に何か聞かうといふ折角の座談會だつしやる。それにまるで内幕のさらけ出しや。やれ、弟子が

師匠を立てないの、馬鹿にするの、座頭のところへ物を聞きに來ないの。そんな事、あこで云ふことかいな。もつと云ふべきことが澤山おまつしやる。そんな内幕のこぼし話持ち出して、先方さんどう聞かつしやるやろ。文樂は結構なものやあと、やつと目をかけてくりやはるハナチやおまへんか。先方さんも偉い御方ばかりだつしやるが、こつちかて座頭も紋下も行きやはつとるのだつせ何の爲の座談會かなあと、委しいこと知りまへんが、呆れて了ひまさ。」これは、當日お招きに與からなかつた若手組が、其の會の模様を又聞にしての不平であるから、萬事果して其の通

りであつたかどうか筆者にも分らぬ。併しいろいろ探つて見ると、會の内容は大體そんな事に終始してしまつたらしいが、それが果して事實とすれば、幹部どころのグウタラサ加減は固より松竹からも相當の指導者が介添として参加してゐるといふのに、何といふ呆れ返つた不用意の事であらう。

文樂座限りの内輪の寄合話なら、弟子達の問責も結構である。弟子が師匠を立てない、尊敬を拂はない、それも否めない事實である。今は世間一般が然うした傾向にあるとは云へ、文樂の樂屋ばかりは美しい世界であつた。それが今は崩れて來つゝある。ハタの見目さへ不快を感ずるものが往々ある位だから、師匠達の不平も無理はない。併しそれは此の結構な場へ持出すべき問題であらうか。それをお歴々に訴へて幾何の効果があらう。又、文協の連中が、そんな内輪のブツカサを聴かうとして、此の會を催したのでもある

藝を教へ、時には足がまづいと自分で黒衣を被つて其の足を遣つて見せたりしたといふ事である。文五郎もお節介の世話やきと來てゐるので、能く弟子に教へたものだ。習ひに來る來ないに拘はらず、世話をやきすぎた時代さへある。

然るに或る大どこの幹部は、「藝は口のハタのマ一粒だ」といつてテンで教へない。云ふ心は、「藝は自分の飯の種だ、それを教へては自分の口が乾上る」といふのである。

此の一事は樂屋でも今に不平の種になつてゐる。此の間も小兵吉、政龜の古老連中が云つてゐた。

「自分の藝のうまいのは誰もが認めてゐる。それを惜しんで教へずにおいて、ハタが何時までも拙いから、自分のが特別に光るやと思つたら、大間違ひだつせ。相手も上手なればこそ自分のが光るのです。こないな風で人に藝を教へなんだら、

まい。文樂は結構なものだ、古典劇として保存すべきものだ、思想善導の上からも、國粹尊重の上からも、この文樂保存乃至興隆の爲に、官邊の力を加へても大に謀つてやらねばならぬ——斯うした注意がやつと振り向けられて來た、謂はば千載一遇の機會ではないか。其の絶好の機會に逢著しながら、何一つ割切な問題も出さず、註文もつけず、内輪のアラを曝け出すとは、何といふ不體裁、不所存千萬の事であらう。

問題は幾つでもある。(一)現在の限られた時間では、通し物の上場は絶対に不可能で、之では古典の完全な保存は絶対に出來ない……といふ希望も述べられよう。(二)人形遣の實用の問題——兵役は免かるべからざることでどんな事情があらうとも論議參酌の餘地はないが、足が無くては人形にならぬ實情を訴へて、せめて或る數だけは費用を免除して欲しい……斯ういふ希望

文樂はつぶれて了ひまつせ。」これは自分が話したと書いてくりやはつてよいといふ事だから、名を出させて貰ふ。これも文樂滅亡論の一つで「文樂滅亡」を歌に詠ふ人達のお氣に入ることであるかも知れぬが、兎も角世間には見當外れの詭言の多いに驚かざるを得ぬ。

も出すことが出來よう。

まだ幾らもあらう、それ等の重要な問題を述べてこそ、折角の此の會の意義も深まるのである。聞く所によれば此のブツカサ不平の尻について、どなたやらが、人形遣の若い連中が、座頭の所にさへ、教を乞ひに行かないとか何とか仰しやつて、文樂の林主任が、「そんな事はない、紋十郎さんの所などへは皆が聞きに行きます」と助け舟を出して其の場を救つたといふ事であるが、然ういふ事も此の場で仰しやるべき事ではあるまいかと思はれる。何故なら之も内幕暴露の一つで、お歴々の介釋はうけられない無用の贅言、而も見當外れの觀察であるからである。

外の藝道ではどうか知らぬが、文樂の人形遣は、昔からわが工風の技を秘密にして容易に人に洩へず、それで互に腕を張り合つて鑄を削るといふ癖があるが、死んだ多爲藏は全然逆で、實に弟子の面倒を能く見、親身になつて

除計な事を書きそへて了つて恐縮であるが、何はさて前記の如き絶好の機會に、太夫、三味、人形の幹部が顔をそろへ、松竹からも立派な介添がつき他に一二の關係指導者も列席しながら若手たちが隨喜の涙をこぼすまでの効果をあらしめなかつたといふことは、眞に遺憾千萬の事である。(完)

營業課目(信用結婚・素行調査・保護尾行・監視
所在捜査・民刑訴訟・關スル證據蒐集)

三 審 社 理 事 長 笠 原 善 三

(東都五十義會常任書記)

事務所 東京都澁谷區並木町四
電話(青山)二〇五六番
自宅 東京都中野區上町二八

山本元帥 兩將慰靈竹本喜美太夫
山崎部隊長

北と南のはてまで薰る散りて尊き櫻花

文樂に關する青々の俳句(一)

安原 仙三

故松瀬青々の俳壇に於ける偉大さは今改めて申上る迄もない、生前非常に文樂を愛好し獨特の鑑賞眼を持つてゐた。それは冷い批評家の態度ではない、温い後援者の心持であつた。郷里(堺)の關係上故越路太夫とは特に親交が深く、又故津太夫とも親しかつた。今その句集より文樂に關する句丈を抜粋して見た。然し此の外まだ、澤山ある筈であるがそれは次の機會に補遺したい。

竹豊故事に

南無右衛門が寝る場見たけれ臚月
春の夜に寝たれば女や南無右衛門
花盛り大阪中が文彌節
行く雁を泣かせつ六字南無右衛門

お輕の落したる簀

珊瑚珠やまぼろ男のついと挿す

七段目茶屋場

傾城も兵家も春のそら寝かな

文樂座見物忠臣藏山科の場(二句)

雪にてるあはれ戸無瀬の刀かな
ものよふや落つれば落つる竹の雪

二代目吉田玉造を悼む

勾欄の一方淋し花の時

豊竹呂太夫悼(註初代呂太夫也)

見臺に思ひ出づべし竹の秋

近松門左衛門像贊

青黛淨瑠璃つくる萩の人

文樂座(註初代紋十郎也)

ちり柳紋十郎の人形かな

秋津洲の發音

岡田蝶花形

日本の古名秋津洲は「あきつしま」でも「あきつす」でもどつちでもよいといふに對し(古くは「あきづしま」又「あきづす」といふらしいが、それは別問題とする)。富士松奥陸太夫はしつこく淨曲研究及新内の雜誌「モランダム紙上」あきつしま「一本鎗で、私に反省を求められてるが、私も元來別の意味の發音の誤については、人が何といはうと追求する性質であるが、これはかりはどつちでも宜敷いといふ方が學問的である。

もし陸奥大夫のいふいひ方で「あきつす」が誤なら次の三作者にも反省を求める氣であらうか。

(第一) 近松門左衛門作國姓爺合戰旋壇女道行に「語る間に敷島の、はや秋津洲の地を離れ」とある、これに解釋した難波みやげといふ本に「敷島もあきつすも日本の別名也」とわざわざ「あきつす」と平假名で書いてある。

(第二) 紀海音作、愛護若婿箱に「豊秋津洲の御あるじ」とある、これも「あきつす」でなくは語呂が悪い。

(第三) 並木宗輔作、鷗山姫捨松に「我秋津洲に法臂縁」とある、これも「あきつす」とよませるための作法であることは一見してすぐ分る。この他探せばまだ、あらかう。





忠臣藏 スパイ合戦 (二)

伊藤 紅 二

上でのいさかひになるのだから面白いと云ふもおろか、まるで手に汗をにきるところの段ではない。
ところが相手の大星はもうこの時には、ごろり横になつて白河夜船の高いびきと來てゐるから、てんで話にも何にもなつたものではない。

「ナ申し、ナ申し、
と何べんゆすぶりおこせばこそ、ねつから起きようとはせぬ。

この邊はまさに敵をたばくる六階三略虎の巻とても云ふ處がある様だ。

之の平右衛門當惑の體をかいまみてゐたのが、さつきの三人侍であるが、

「コレサ、平右衛門、あつたら口に風ひかすまい、由良之助は死人も同前」

といきまいて、すんでに刀の錆にしようとする。或意味では七段目での息をばづませる處であるが、其の言分が

「一味連判への者へのみせしめ、いざいづれも

標題が面白いと云ふ前うけを狙つたわけでもないが、たしかに時局むきだと云ふおほめのことばもあつたが、又スパイ、スパイなどと敵性、否々敵國語を憶面もなく使つてはいけないと云ふ御仰せも別になつたけれど、それ等は本筋には大した關係もない。

それよりは忠臣藏の七ツ目で主従のつながりの面白さを逆にみせてゐる所が、例の由良之助が、平右衛門を擲捨する所、

「青海苔もらふた禮に大々神樂を打つ様な物、我等知行千五百石、貴様とくらべると敵の首を斗升ではかる

と一刀兩斷と云ふ所を、さすがは主従の情愛のこまやかさから寺岡が「しはらく」と云ふ寸法、とど、なだめすかしてのそのことばが主思ひである。

「つくづく思ひまはしますれば主君にお別れなされてより怨をむくはんとの艱難、木にも萱にも心をおく云々

とある。

その「木にも萱にも」が面白い、其の譬喩がおもしろいばかりか、如何にも思つまるやうな防諜合戦の様子が、まるでひし／＼と身にでも迫るやうな思ひがする。

結局「酒でものまねば命はつづくまい」と主おもひの限りをつくして三人をたしなめなだめる芝居での見世場である。

しかも、この三人をむりに一間へつれて入るのだが、其の邊の淨瑠璃文句が大近松そつちのけの名文句である。

「三人を伴ふ一間は善惡のあかりを

程取つても釣合ぬく

處でやめた、聞えたか、とかく浮世はこうしたものぢやつく／＼

と、こゝで又由良さんたるもの敵をたばかる手だてとして先づは足輕平右衛門をたばかる、のんだくれのしぐさよろしく引かけるのであるが、之を聞いた寺岡は、やつきになり眞顔になつて

「之は由良之助様のお詞ともおぼえませぬ」

ときつとした處をみせる。

何のことはない間諜合戦は先づ味方も味方主従の間で火の出る様な言葉の

てらす障子の内かけをかくすや月の入山科よりは一里半息を切つたる嫡子の力彌
で力彌の出になる。

力彌は内をすかして正體なき父の寝すがたを見た上で、

「起すも人の耳近しと枕元に立よつて響にかはる刀の鏗音こひ口チャンと打ならせば

は武士のたしなみをみせてすこぶる萬點、舞臺効果も申分なし。

この邊は武士道を解せぬものにはさつぱりわからぬのであらうが、すくなくも弓矢とるものにとつては、このたしなみが第一にあげられる忠臣藏を貫く味ひであらう。

この力彌は、御臺顔世御前からの急のお飛脚密事の御狀で、之に御口上までついてゐる。注意深い父親由良之助は、すかさず力彌にきくたゞしてゐるが、力彌の曰く

「敵高野師直歸國の願ひ叶ひ近々本

國へまかり歸る……」

と云ふ、けだし四十七士にとつては、きくのがしのならぬ、それこそ密事である。

委細の儀はお文との御口であるからどちらもどちら防諜には及第である。

さあこれからが七段目本格的な、スパイ合戦になるのだが、それまでの手順に力彌の白ぬりが、花道からの出よ舞臺が急にひきしまつて來るのも、スパイ合戦の序幕としては頗る効果的と云ふべきである。

しかも、其の文句にも味がある懸言

葉、
「御口上よし／＼其の方は宿へ歸り夜の内に迎の駕いけ／＼はつとためらふ隙やなく山科さして引返す先様子氣遣ひと狀の封じを切所へは一すいきづまる思ひがある。之から九太夫の出になる。

人形の頭に從いて 語つた組太夫

吉田文五郎

このたび中山泰昌さんが、私の爲に『文五郎藝談』をまとめて下され、大層立派な本が出来上りましたが、その中の「三枚目の澤市」に因んで、今一つ思ひ出話をして見ませう。

先代大隅太夫さんが、文樂座へ入つて「壺坂」を出されました時、人形遣の「親玉さん」の吉田玉造さんが、澤市を三枚目のかしらで遣はれました。あまり汚いので大隅さんも氣が咎めて語りにくく、よつて今少し綺麗なかしらに替へて貰ひたいと注文を出されましたら、玉造さんは「お前さんの聲では、あのかしらでない」と釣合はん、も

つと綺麗なものにしたきや、お前さんの聲から直しておいでなはれ」と突つばねられました——これが「三枚目の澤市」と題してのお話であります。之につけて思ひ出すのは組太夫さんの事でありませう。

組太夫さんは淡路から出た方で、晩年は東京へ行つて素人のお師匠さんとなり、同地で亡くなられたのであります。大隅さんと交替に紋下にもなられ、立派な太夫さんでしたが、この方は、能く人形のかしらに何を遣ふかは、人形遣に聞いて、それによつて淨瑠璃を語られたのであります。

ひます。

第一、文樂座の「親玉さん」初代吉田玉造さんの息子の玉助さんが、二代目玉造を襲名したとあるのは飛んだ誤り。玉助さんは玉造さんの存亡中に亡くなられましたから襲名されよう筈はなく、二代目玉造は、今の玉七さんの先代の玉七さんが襲がれたのであります。(筆者曰く、石割松太郎氏の「近代演劇雑考」中には、初代玉助が二代目玉造となつたことを特に委しく示されてあり、平凡社の「大辭典」にも亦然うあるが、いづれも誤りである。)

(四四頁、四九頁)

第二、「桐竹龜松」の名は、辰造さんの息子の辰吉さんが始めて興した名としてあるので誤解される恐れがあります。之は先代紋十郎さんが一時名のつた名前、辰吉さんによつて、龜松の名が人に重んぜられるやうに興された云々の意で、之については、中山さんが別に委しく御かきになるとの事

御承知の如く人形のかしらには、孔明とか文七とか源太とか、又團七とか檢非違使とか鬼一とか、老若男女町人武士、それ〴〵に應じて用ゐるかしらが二三十種ありまして、何の役にはどのかしらを遣ふと、大體昔から極つてはゐますが、何分數あることですから太夫の方では一々これを心得ては居ません。それで組太夫さんは、自分の語り物が極ると、人形遣に其の役のかしらが何であるかを聞いて、文七の頭ならば文七らしく、孔明ならば孔明らしくと云つて語られたのであります。

これは實に珍らしいことでもあり、面白いことでもあると思ひます。大隅太夫の方では、よく本よみをして、松王は松王らしく、源藏は源藏らしく、相模なら相模、お染ならお染と、それ〴〵の人物に語りこなせば良いわけでありませうが、人形のかしらは特殊なものを除いた外は僅か二三十種類しかありません。其の少い數のものをあれに

ですから、この個所も第三版では訂正されることだけ申しておきます。(一〇七頁)

第三、「片はづしの儘」の一項であります。片はづしの御殿女中、たとへば、先代萩の政岡などが、御上使をお迎へする時は、髪を打捌きに直して出るのが本式であるが、多くは其のひまがないので、髪は其の儘にして、襦袢だけ著けてお迎へします。ところがこの「襦袢だけ著けて」が、あべこべに「ぬいで」となつてゐるのは大きな誤りでした。(一七二頁)

第四、「胴から腕へ」の一項中、鎧武者も丸胴の如く記してゐるのは誤りで、之も委しくは第三版に訂正いたします。

以上は大分大きな誤りでありませうから、御誌上を拜借して訂正させて頂く次第であります。(終)

もこれにも兼帯に用ゐて、その人物を作り出すのでありますから、随分と無理な點も出て來ます。ところが組太夫さんは、そこを能く理解せられましたまづかしらの種類を聞いて、それに適ふやうに語られました。之は大隅さんの聲の色によつて、澤市を三枚目のかしらにしたいといふ「親玉さん」を裏から行つたやうなものであります。さすがは組太夫さんです。人形に對してそれだけの理解があつてこそ、始めて操芝居は眞個に成り立つのであります。今の文樂に一番望ましいものは、床の人が、人形芝居の床で語つてゐるのだといふことを心得てゐて頂きたいことでもあります。

さて餘談を申し上げて相すませぬが、私の『文五郎藝談』には二三ヶ所間違つた點があります。第三版ではすつかり訂正されることになつてゐますが、初版、再版とも其の儘でありますから、此處で訂正させて頂きたいと思

素女の「合邦」

内田三千三

築地國民新劇場の淨瑠璃鑑賞の夕、六日目を聴く。

重之助の「岸姫」と素昇の「新口」が濟んで僅かに素女の「合邦」後半と南北座人形入の掛合「十種香から狐火」を觀聽した。

素女の彈語り「合邦」は正格な滋味と吐があつて流石は凡藝で無い、主要人物の表現が、技巧の驅使に依つてのみ變る色彩的な演出でなく、心底から變化するコクのある演出が堪能させた。素女の藝は、呂昇の如く華かに満場を酔はせ、艶殺させる、音律美の義太夫ではないが、嘯みしめる程に味の出る濛い正しさが、淨瑠璃の本隨に迫る

氣魄と、技藝の充實を覗かせて、男太夫の領域へ藝が行き届いてゐる。若い新進の女義は素女に學ぶ可き要點は肚であり、淨瑠璃演出への正しい心構へであることを膽に深く銘記すべきである。

評者は誰彼れの差別無く、聲も調子も素女張りで行けと從憑するのではない。豊かな美聲に潤ひのある艶に、粗大な力演に、素女の肚と氣魄を織り交んで語ることが、若き女義の義太夫の眞隨へ近づく一つの近道であると沁々感じるからである。

一例を挙げると「入平も悲嘆の涙：」など、多くの女義が多少引かけて當て味にユスル箇處を、じゆつくり吐で持たせて味を出す演出が濛くして滋味がある。

玉手が手負になつてからの主要な述懐も念所々々をエグリ乍つ、たへず深傷の心を忘れずに餘韻を滲じませ、陰翳のある語り口も行き届いて結構だ。

入平の奴言葉も作らずに身分が出て縮つた味がある。只、哀韻條々と迫る段切れは、案外モリ上らず地味に了へた。「佐太村」や「合邦」の段切れは哀感胸を搔きむしる如き義太夫獨得の甘美な悲愁が津々と流れて欲しい。これを素女の「合邦」の微瑾とする。

南北座人形入の「二十四孝」は純職業人形劇團でない稽古不足が寒々と舞臺に露呈して、魂を忘れた人形の空虚な動きが印象を恫しく散漫にした。

三國氏以下の努力は分るが、努力だけでは到底割り切れぬ藝の修業と錬磨の不足を感激させて、今更のやうに人形操作の至難さを再認識させた。

それが爲め情韻の脈絡は無慘に切断され、床と舞臺を結ぶ三位一體の妙境が最後まで湧出せず、折角ひの素女の勝頼に藝骨があるのみで、折角の住若素八の努力も水泡に歸した。

消息 會報

あれからの私

三 樂 生

前略—あれからの私は防空指導で全國に出て居ましたので、全く見臺に向ふ機會がなく下手が益々拙劣の域に落ち込みました。

五月に「日本の女性」を出版しました、續いて「母の魂」なる事實小説を脱稿しましたが、出版會で出版不承認の件の通知をうけ落膽しました、今又「義烈貞婦の詠める歌物語」といふのを執筆中ですが同會で承認すれば此秋には上梓さるゝ事とせう。この八月大阪に滞在中に中座で梅玉の三勝を見ました、少し背が高いが堂に入った優の

舞臺術(新語)には全く魅せられました。九月の歌舞伎の「先代」を是非見たいと思つてゐますが、南島島まで敵機が押寄せて来る緊迫した昨今の現状では防空の強化と資材の充實を圖り三千年來いまで且つて汚されざりし光輝ある日本國土を守らねばなりません。斯様な事、之れを觀劇する隙がないかも知れません。

九月廿六日東橋亭の東都女義會を聴き、一口評を試みよう。駒榮の尼ヶ崎は眞劍、佳世子の揚屋は達者、綾清の三十三間堂は節に捉はれて居て、自分ものになり切つてゐない。綾作の宿屋は相當達者だが身振等が舊式である

竹田尾温泉にて

嵐峽のいよゝせまりて蟬のなく

岩山は突兀として蟬のなく

釣橋の歩み危し河鹿なく

草津より

鈴木美松

當地は本年非常に涼しく候へ共病客少なく且つ語り手も昨年より半分位無之候、然るに變り種の大島伯鶴氏來草、又大阪より三味線の鶴澤六之助氏も合宿、茲に合同會を開催又十五日には栗生園樂泉園へ趣き慰問義太夫會相催し盛大且つ人氣昂揚に達せり。

(八月六日、大東館) 柳(昇華、六之助) 酒屋(福壽、文之助) 太十(君光、文昇) 忠六(太平、文昇) 宿屋(美松、六之助) 十一日、六之助後援會) 辨慶(昇華) 新口(君光) 合邦前(太平) 同奥(三樂) 以上絃(六之助) 音四(伯鶴、津賀助) (十二日、同) 太十(團圓) 安達(美松) 忠四(以上) (六之助) 酒屋(太平、文昇) 本下(伯鶴、津賀助) (十五日、樂泉園にて慰問義太夫會、入場約千人) 柳(昇華、六之助) 太十(君光、文昇) 安達(美松、六之助) 忠四(一、津賀助) 忠六(太平、文昇) 本下(伯鶴、津賀助) (十六日、大東館、綾之助合同會) 太十(喜照、綾之助) 又助(一、津賀助) 鳴

戸(君光、津賀助)鮎屋(柳光、綾之助) 太十奥(美松、津賀助)(廿八日、奈良屋旅館)本下(昭南)宿屋(美松、御殿(老松))以上(文昇)梅由(たから、よね子)

大垣より

吉田美地司

前略——今年は大垣の吉岡十八公氏より誘はれ同封番組通り慰問をして歸京致しました事を報告致します。私は毎年舊盆に先祖の法要の爲め八月十日より一週間高野山龍泉院に家族連にて滞在致します。本年は催ほしの爲に山を十六日下山、十八日に鳥羽錦浦館にて吉岡氏一行と落合ひ、十九日は鳥羽の小濱と云ふ漁師町の寺院で催しました。が終りまで聴衆は立ちませんでした。翌日は海上一時問答志鳥と云ふ海女で有名な鳥の學校で一行真裸となつて總掛かりで教壇を重ねて舞臺にするなど大騒ぎでありました。

島は五百軒程の漁師町、今は寒天の原料天草の荷造で産業戦士は忙しく、開演前より老人達が詰めかけ七八百人で、講堂は満員の盛況でありました。此の島には昔から天狗連と稱する素養連があるだけに、聞ながら語っておりす、魚は澤山有りますが旅館の寝具が悪いのにはよりました。

(八月十九日、小濱町寺院、喜勝會主催)山名屋(大垣、立花)先代(同、みどり)壺坂(東京、美地句)寺子屋(大垣、十八公)絃(喜左衛門)

(八月廿日、答志島町國民學校、主催同會)宿屋(みどり)野崎(立花)忠四(十八公)先代(美地句)絃(喜左衛門)

富山より

和田春和

同封番組の通り三日間富山市で開會した處、同市の竹本隅重師及同師の御連中の一方ならぬ盡力で三日間共文字

通り大入満員の盛況、最終日の如きは定刻には入場御断りの札を出すなど近年になき人氣で一行の満足此上もなく歸途松本市に廻り同市の鶴聲園と云ふ貸席で廿二、三の二日間開催、これ亦非常な盛會を極めました。これには浅間温泉井筒の湯に滞在の黒川叶氏も加はりました。

なほ富山で私達が開催する前日即ち十七日文樂座の伊達太夫と津摩太夫が一日無料で開催して居りました。これは私達素養に對する道義上面白からぬ事と思ひます。これに對し別に異議を申立てる権利はありませんが、文樂の信用に關しはしないでせうか。

(八月十八、十九、廿日、徳風會館。主催原田越巴。後援竹本隅重會)

(初日)辨慶(守吉)壺坂(富昇)太十(松玉)布四(吞笑)本下(柴樂)先代(東好)彌作(五鈴)美濃屋(越巴)酒屋(花房)帶屋(春和)鳴戸(盛鶴)忠七(由良之助)春和。重太郎、越巴。彌五郎、再

鈴。喜多八、盛鶴。力彌、東好。お輕松玉。亭主、花房。平右衛門、吞笑。絃平)(二日目)辨慶(友春)鳴戸(一司)逆櫓(吞笑)紙治(越巴)鮎屋(花房)沼津(柴樂)安達(東好)十種香(松玉)忠三(盛鶴)寺子屋(吾鈴)壺坂(春和)千兩幟(おとわ、越巴)鐵ヶ嶽、吞笑。猪名川、春和。呼出し、五鈴。大阪屋、柴樂。和歌吉)(三日目)忠六(つばめ)紙治(歌松)合邦(吾鈴)阿漕(春和)赤垣(盛鶴)酒屋(東好)帶屋前(越巴)同奥(松玉)忠四(柴樂)鮎屋(吞笑)新口(花房)野崎(久作、春和)母、柴樂。お染花房。久松、東好。下女、吾鈴。お光越巴。絃平、ツレ、和歌吉)以上絃(隅重、和歌吉、絃平)

綾秀會より

傍島出雲

本會故恩師竹本綾秀師の逝去直後會名をそのまゝ繼續して故人を偲ぶ事に

なり、竹本綾清師を後繼として四ヶ月間の稽古をなせしが、師匠の出稽古にては會員が充分な練習出来ざる爲め義界の巧師たる鶴澤清吉師を永住師匠として一層の練磨と洗練に眞摯な精進に雄たけひ會員十五名勢揃して日本精神發揚の爲め深淵に透徹する氣魄を結集して居る。

城崎より

濃沼馨

八月初旬より城崎へ参てゐます。此度は義太夫の事でなく獨りですから淋しく只毎日、湯につかつてゐます。鳥取に地震がありましたして其の餘震で、毎日ぐらぐらして驚かされて居ります

(九月十二日)

別府より

足達延壽

現文樂座出勤の豊澤廣二師は曩に、

高松沖に於て聖山丸と衝突し沈没したる浦戸丸にて遭難したるも辛ふじて九死に一生を得、再び斯道に精進する喜びを紀念するため、出身地たる日田市長善寺境内墓地に俱會淨安所を建設中の處九月十一日其落式を挙げ、祖先追善並農村産業陣慰安淨瑠璃會を催し地方稀なる盛會を極めたり。其出演諸氏及語り物左の如し。

秋田より

鈴木美松

今回遺家族及び白衣の勇士を慰問の爲め秋田市に赴き、湯澤町の大坂旭氏(五十義會々員)其他と合同の上、秋田魁新報大講堂に於て慰問義太夫を開催し入場千數百名の盛況を極めた。(九月十八日)

(十四日)忠四(東朝、民龍)壺坂(太

郎、民龍)先代(龍司、民龍)寺子屋(ほくろ、團市、新口(錦、團市)太十(旭、民龍)安達(美松、仙十郎) (十六日、湯澤町浄土寺にて)太十(龍司、民龍)野崎(よし子、民龍)宿屋(東朝、民龍)先代(太郎、民龍)合邦(錦、團市)陣屋(ほくろ、團市)安達(旭、民龍)太十(美松、仙十郎)

高知より

魁家 廣九

私共一座今般歌舞伎名題男優中村吉三郎、澤村昇二郎、坂東和三郎を加へ一座廿三名、八月月上旬より四國巡業、高知市堀詰座を振り出しに丸龜市、多度津、琴平、高松、宇和島、松山と打ち、來る九月十二日より四日開岡山縣玉津市東洋劇場を晝夜開演、九月二十日初日で福井市加賀屋座開演、九月廿五日より信州地方を巡り十月月上旬歸京の豫定に候、狂言はだんまり、安達ク

原三段目、重の井子別れ、伊勢音頭、先代萩通し、男の花道、鳴戸等にて各地大好評満員の盛況に候いづれ十月歸京の上、又御報申上げ度候

▽素玄浄曲研究會 同會の五十九回練成會は臨時會として會費一圓を以て九月五日午後一時より五時迄麴町山王山「山の茶屋」にて開催。淨瑠璃中の美辭(岡田蝶花形)、藝に生きる力(金川文樂)太十(芦鶴、仙十郎)淨瑠璃と臺詞、諸方言、其他(金田一春彦)東西

アクセントの基本型(大西雅雄)櫻時雨(土佐廣、綱助)、なほ九月の例會(六十回)は廿四日午後一時より牛込「千鳥」にて開催。鮎屋(一司)十種香(紫蝶)近八(千晴)酒屋(綾清、綾柳)、十月例會は(六十一回)十月十日午後一時より同會場にて開催。野崎(悟堂)堀川(竹史)姫山姥(小陣司、猿幸)
▽長野太子會館 三並義昌、岡野芦鶴、植木はつ子の三氏は八月廿二日よ

り三日間、長野太子會館にて同市小林瓢氏後援の下に義太夫會開催。(初日)辨慶(錦)酒屋(はつ子)山名屋(芦鶴)鮎屋(義昌) (二日目)十種香(豊玉)野崎(芦鶴)宿屋(はつ子)寺子屋(義昌) (三日目)三代記(錦)太十(芦鶴)安達(義昌)絃(仙十郎、和孝、相玉)

▽義太夫祖先祭 東京義太夫因會は毎年十月十日回向院にて祖先祭を催して來た處、今回邦樂協會と勤勞報國その他の協議を兼ね九月十五日に繰上げて執行した。

▽女義若女會 會場東橋亭。七十三回(八月十五日開演) 柳(駒榮)安達(素八)壺坂(素次、清三)岸姫(重之助、猿幸)野崎(素廣、巴住)七十四回(九月一日)先代(駒榮、素花)柳(素次、清三)壺坂(素八、駒登久)辨慶(素廣、巴住)朝顔(素昇、猿玉)

▽義太夫鍊成道場 邦樂協會事業部主催にて九月十三、四日の兩夜小石川駕籠町一壽々本」に於て因會男子部等一行中の豊澤廣助師を手傳ふべく別府から浦戸丸に乗出して遭難をしたのであるが、衝突して僅か五分間で四十丈の海底に船は沈んださうで、師は一度浮きあがつたが渦に巻かれて再び沈み(二度沈む時は最う駄目のさうである)奇蹟的にも又浮上がつて五十五分間に泳いだり漂流をしたりしてゐるうちに救助されたのださうである。衰弱も打撲傷も快方に向つた師から奇蹟的に救はれた喜びの長文が八月北海道へ出張中の廣助師の許へ届いた。

出演の下に義太夫鍊成道場を開催。二日間出演者語り物。紙屋、忠六(卯太夫、紋四郎)合邦、辨慶(杣太夫、松市郎)先代、新口(朝見太夫、芳太郎)柳太十(近衛太夫、猿三郎)白石、聚樂町(都太夫、新造)

▽小樽「松葉會」 八月七日より四日間献金義太夫會を催ほして盛會裡に好評を博した小樽「松葉會」はこれが御禮として同廿八日より三日間花園町會事務所にて義太夫會を開催。(廿八日)

鮎屋(廣昇)柳(廣陵)中將姫(松光)日吉(廣喜)新口(豊後)朝顔(廣江)玉三千三(合邦)廣遊(城木屋)松玉(儀作)廣葉(忠四)廣一郎、廣助(堀川)松葉家、廣一郎(廿九日)安達(松廣)酒屋(松玉)杏掛(松光)忠六(廣昇)又助(廣陵)御殿(南光)寺子屋(廣鳳)壺坂(廣壽)太十(梶晴)鰻谷(壽)紙治(廣一郎、廣助)柳(松葉家、廣一郎) (卅日)沼津(廣遊)壺坂(廣江)鳴戸前(千三)梅由(政太郎)陣屋(廣喜)本下奥(一聲)鳴戸奥(喜

昇)赤垣(司)酒屋(松廣)野崎(團政)小揚(廣一郎、廣助)安達(松葉家、廣一郎) 因に豊澤廣助師は献金義太夫會の際に國防費として北海道新聞社を経て金五十圓を献金した。

▽旭川「松葉會」 旭川松葉會連は豊澤廣助師を迎へ、八月廿二、三の兩日、平間會館に於て歓迎義太夫會を催ほした。(廿一日)宿屋(壽樂、忠六)清玉(白石(貴鳳夫人)赤垣(貴鳳、御殿)貴松(紙治)廣一郎)太十(松葉家) (廿三日)酒屋(壽樂)壺坂(小樽、廣壽)鮎屋(三京)合邦(東勝)沼津(春漁)忠九(廣一郎)堀川(松葉家)絃(廣助、廣一郎)

▽豊澤廣二師 浦戸丸景山丸衝突事件は七月十四日新聞紙上に詳報されたが、本誌前號當座帳に記した如く、豊澤廣二師は遭難をして九死に一生を得たのである。廣二師は、播州飾磨製鐵所産業戰士慰問に赴いた大阪文樂座竹本重太夫、竹本住太夫、竹本長尾太夫

東京 静岡 合同義太夫會

静岡市加藤壽松氏の肝煎りで、東京古老の星野桔梗、長谷川文久、安藤光樂三氏の來靜を迎へ、今回新築落成した加藤壽松氏邸宅に於て九月廿四日夕より同地の古老森魁氏始め歴々の合同にて左記番組の通り十五分間會を催ほした。

赤垣(東向)紙治(義好)菅四(壽)布四(聲保)忠六(八笑)彌作(光榮)堀川(桔梗)杏掛(安樂)合邦(素竹)陣屋(錦)濱松(勇正)阿古屋(壽松)菅四(文久)絃(綱助、新勇)

◎本欄は大會又は新生の會を報道致します。
 ◎開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。
 ◎持種の催はしの外、前書を略します。
 ◎番組御送附なきもの、或は通信なきものに記號
 洩れとなります、御諒承を乞ふ。(掲載順不同)
 ◎なほ見出しに二號活字を使用、特別掲載方御希
 望の會は其旨御一報を乞ふ。

太 棹 社

東 都 五 十 義 會

時局柄素義の催はしは不可能になつたといふ矢先き、審査
 競演を以て傳統ある帝都唯一の東都五十義會は第卅九回秋
 季大會を十月二十日より四日間、日本橋俱樂部に於て吉田三
 芳、安藤光榮、長谷川文久、高瀧操(東京)、竹本住太夫、野
 澤吉彌、豊澤團友(大阪)の七氏審査の下に、例年の通り堂々
 と開催する事になつたが、申込み豫定人員は約百名の處陸續
 申込み多数に昇り壓倒的人氣を以て、九月末日申込みを締切
 つた。

淨 瑠 璃 鑑 賞 の 夕

年二回東上の大阪文樂座人形淨瑠璃は其都度立錐の餘地な

き超満員の大効果をあげ、今夏の新橋演舞場は十日間の日延
 べをして卅五日といふ長期興行の記録をつくつた松竹本社は
 今回初めての試みとして、九月四日より十二日迄毎夕四時半
 より(日曜は晝夜二回開演)築地國民新劇場に於て東都一流
 の女義總出演の下に、大切には南北座の人形を使用し、語り
 物毎日替りとして「淨瑠璃鑑賞の夕」を催はしたが、松竹は
 今後春秋二回此種の催はしをして東都女義界の振興を圖る事
 になつた。十二日間の語り物左の通り。

(四日) 吃又(猿春、三生)合邦(素昇、猿玉)新口(綾清、
 清二)鮎屋(駒若、猿幸)酒屋(素女) (五日晝) 一忠六(素次、
 清三)柳(住若、清一)壺坂(彌周、三生)太十(素八、駒登久)
 橋本(素女) (同夜) 一陣屋(素八、駒登久)宿屋(彌周、三生)
 戀十(駒若、猿幸)紙治(住若、清一)寺子屋(素女) (六日) 一
 辨慶(小素)沼津(素八、駒登久)安達(越駒、三生)湊町(綾之
 助、清一)先代(素女) 三日間 一大切野崎村(久作、土佐廣。
 お光 素女。お染、綾千代。久松、猿春、母、素次。綱助、
 ツレ、駒登久、小素)人形(南北座) (七日) 一八陣(綾清、清
 二)吉田屋(綾之助、清一)志慶寺(猿春、三生)柳(重之助、猿
 幸)鮎屋(素女) (八日) 一松王(小素)鳴戸(素廣、巴住)忠六
 (佳仙、清二)酒屋(越駒、三生)布四(素女) (九日) 一又助(佳
 仙、素次)宿屋(素次、清三)岸姫(重之助、猿幸)新口(素昇、
 猿玉)合邦(素女) 三日間 一大切廿四孝(八重垣姫、住若。勝

頼、素女。濡衣、素八。謙信、素次。郎黨、駒榮。清一、ツ
 レ、清二)人形(南北座) (十日) 一鈴ヶ森(駒榮)鳴戸(重之助
 猿幸)寺子屋(小津賀、紋教)質店(彌周、三生)太十(素女)

(十一日) 一玉三(佳世子、綾作)紙治(越駒、三生)陣屋(素
 廣、巴住)湊町(染登、猿幸)安達(素女) (十二日晝) 一蝶八
 (素次、清三)中將姫(小津賀、紋教)白石(染登、猿幸)御所三
 (素廣、巴住)御所四(素女) (同夜) 一柳(素廣、巴住)長局(染
 登、猿幸)野崎(素次、清三)先代(小津賀、紋教)壺坂(素女)
 三日間 一大切堀川(與次郎、綾之助。お俊、素昇。母、素女。
 傳兵衛、素八。おつる、佳世子。猿玉、ツレ、猿幸)人形(南
 北座)

竹 本 近 衛 太 夫 公 演

竹本近衛太夫公演會の第二回を九月廿六日午後五時より丸
 の内大東亞會館にて左記番組に依り開演。
 酒屋(駒龍、駒照)逆櫓(猿春、三生)質店(駒若、猿幸)廿四
 孝(近衛太夫、猿之助、琴、ツレ、猿三郎)

義 太 夫 古 曲 發 表 會

前回から正午より四時半迄の晝間公演と改め好果をあげた

義太夫古曲發表會は今回も前同様晝間公演として十月二日正
 午開場を以て並木俱樂部に於て左記番組に依り忠臣藏三段目
 より八段目迄上演。なほ七段目は結城孫三郎一座の助演があ
 つた。

三段目(卯太夫、絃吉) 四段目(駒登太夫、和孝) 五段目(巴
 太夫、松市郎) 六段目(朝見太夫、猿喜知、胡弓、絃吾) 八段
 目(小浪、巴天夫。となせ、卯太夫。ツレ、駒登太夫。朝見
 太夫) 絃(芳太郎、美之助。ツレ、和孝、絃吾、松市郎、猿
 喜知) 七段目(由良之助、駒登太夫。力彌、卯太夫。平右衛
 門、朝見太夫。お輕、巴太夫) 絃(扇之助) 人形(結城孫三郎一
 座) なほ鶴澤紋四郎師が今回より入會した。

鸚 鵡 會

事務所を澁谷區金王町九竹本染登方に置き、春秋二回東京
 にて開催の外、或は大阪へも出張して鍊磨精進と共に會の發
 展に會員一同協力をしてゐる鸚鵡會は第五回を、十月三、四
 の兩日午後四時半より丸の内大東亞會館に於て開催した。
 番組左の通り。

(初日) 毛谷村(清芳、駒登久) 本下(土佐廣、綱助) 組打
 (染登、猿幸) 湊町(小仙) (二日目) 一白石(清芳、駒登久) 合
 邦(染登、猿幸) 岡崎(土佐廣、綱助) 逆櫓(小仙)

當座帳

▽近江清華氏 八月上旬新京市へ出張中の處八月末日歸京。
 ▽水野 昇氏 浦和市太田窪七四四番地へ轉居。
 ▽河野國聲氏 南方へ旅行。
 ▽岡田道一氏 「湯河原百首」を同好の士に頒布。
 ▽三好 會 同會の義太夫練習所は小石川區水道端町一丁目二番地森氏方へ移轉。
 ▽戸塚喜三香氏 静岡市本町通一丁目一〇番地へ轉居。
 ▽吉坂玉鳳氏 永々病氣にて目下自邸にて加療中。
 ▽橋本梅月氏 腹水症にて神田杏雲堂病院入院。
 ▽相原東雲氏 徳島市富田町一ノ一番地へ轉居。
 ▽箕浦其甫氏 四月より病氣にて昨今漸く良好に向へ靜養中。
 ▽北脇花昇氏 府下武藏野町吉祥寺遷

講局内へ移轉。

▽橋本梅月氏 梅翁と改名。
 ▽三ツ木美登利氏 時局下九月一日廢業し、大森區久ヶ原町一一七八番地へ轉居。
 ▽竹澤龍造一座 八月は岡山、山口二縣を巡業。
 ▽鶴澤清吉師 綾秀會專屬師匠となる

訃報

清水鬼外氏 七月五日永眠。
 高木セイ殿 豊澤芳太郎師母堂高木セイ殿は八月廿三日午前〇時十五分逝去。廿五日自宅にて告別式執行、享年七十八。
 角 豊氏 八月卅日新宿海岸に魚漁中腦溢血にて永眠。
 加藤藤吉氏 新潟市加藤興行部主加藤藤吉氏は六月十二日逝去。
 桐竹門次氏 桐竹門造師門下桐竹門次氏は七月月中旬より淡路松谷病院入院中途に死去、十月七日大阪天王寺一心寺にて告別式執行。
 哀悼の意を表す。 太 棹 社

序文 豊谷崎潤一郎
 齋藤清二郎著

文樂首の研究

B列五號 原色版六葉
 單色版五八頁 本文二〇〇頁
 定價拾圓二拾錢 送料四十五錢
 特製本拾五圓五拾錢 送料四十五錢

本書は人形淨瑠璃、特に文樂の人形の首についての最初の研究書である。眞の文樂の鑑賞は人形首に關する智識なしには不可能であるが、著者 多年文樂首の研究に没頭、未開拓の分野に對する完全なる研究に成功した。かかる研究はなか／＼一朝一夕に出来る仕事ではない。この書は將來首に關する底本になることは、絶對に間違ひないところである。

加ふるに轉載せる圖版、原色版及び文樂首分類表によつて、本書の價値を決定のものにした。

特製本著者署名御希望の方は著者宛（振替大阪二八〇四三）御中込のこと。

東京アトリエ社刊行

定 一 部 金 五 十 錢 郵 稅 一 錢	
六 月 分 金 三 圓 郵 稅 共	五 圓 郵 稅 共
一 年 分 金 五 圓 郵 稅 共	
▼誌代は總て前金御拂込の事 ▼なるべく振替に御送金の事 ▼郵券代用一割増	
昭和六年九月二十三日印刷納本 昭和六年九月二十五日發行	
東京都小石川區音羽町一ノ二四 編輯兼 發行 人 富 取 壽 鹿 東京都小石川區指ヶ谷町四 印刷 人 杵 淵 五 郎 東京都小石川區指ヶ谷町四 印刷 所 柏 葉 社 東京一三八三	
東京都小石川區音羽町一ノ二四 發行 所 太 棹 社 振替東京三一七八番	
(行發日五廿月毎) 號 八 十 四 百 第	

